

広報市民リポーターだより

平成3年度の「広報市民リポーター」による執筆は今号が最終回です。リポーターの皆さんには、これまで独自の視点でとらえたいろいろなことを取材し、報告していただきましたが、今回は、市民リポーターという仕事を通して感じたことや考えたことなどを書いていただきました。

失われることへの郷愁

吉田 一雄

「長走風穴」と「老人の生きがい」について千葉光穂、今井篤両先生にそれぞれ伺った。どちらも私にとっては初めての分野で、専門用語が分からずに知識の乏しさをさらけ出す醜態だったが、お二人が私の質問に懇切丁寧な答えてくれた厚意には心から感謝したい。

自然保護は今や重大な社会問題となり、開発が進むにつれて多くの山や川をはじめ動植物などに大きな影響を与えていることは、私たちの身近な事実としてとらえることができる。千葉先生は昨年夏に珍鳥チゴハヤブサの巣を発見し、実に半世紀ぶりの対面が実現した。そのさわやかさは、市民の明るい話題として記憶に新しい。

私の周囲には、両親をはじめ八十歳以上の老人が多くいる。その人たちに触れて感じることは、好き嫌いなく何でも食べるし、自分の趣味を大切にしていることだ。更に、どんなことにも興味を持って知識を広げようとすると前向きな姿勢がみられ、早寝早起きを守っていることだ。今、週休二日制が教育に浸透しようとしているし、労働時間も欧米並になろうとしている

吉田 一雄 リポーター (大町)



が、果たしてそれが長寿に結び付くのか甚だ疑問に思う。日本人は、働くことによつて独自の国造りをしてきた。時代の要求だ」といつても何でも改革することには私は憂いを覚える。これから、老いの準備に取り掛かろう。

「ごみ」雑感

富樫 蕨子

縁あって市民リポーターを引き受けました。「ごみ問題」を取り上げたきっかけは、ごみ収集車に積んだごみから出火したことが何度かあり、また、ごみ収集の時に針が刺さったり、カミソリで手を切ったりするなどの事故がある度、ごみを出す人たちがちよつとした心配りをするのとてこのような事故は防げるの

富樫 蕨子 リポーター (板沢)



ではないかと思つたからです。日常生活から切り離すことができない「ごみ(塵芥)」。辞書には①ちり、あくた、ほこり、また、つまらないもの、無用のもの②濁水にとけてまじっている泥③挽茶の粉に湯をさして練つたものとありました。ごみは捨てるものとされてきましたが、近年では、再利用できるごみが多いため、世界的に「リサイクル」が盛んに行われるようになり、「ごみ＝無用のもの」とは言い切れなくなりました。

取材してみても、市ではごみ分別収集に大変努力していることを知りました。しかし、毎年度始めに市で各戸に配布している「家庭ごみの出し方」のチラシがごみに出されている現状には愕然としました。ごみ問題のリポートを機会に、市民の皆様が分別

加藤 紀彦 リポーター (大町)



収集に一層協力してくださることをお願いしたいと思います。

大館のまちを考えた一年

加藤 紀彦

市民リポーターになる前は、自分の周りに起こる様々な問題や私たちを取り巻く環境にあまり関心を持たずに、一日をただ時間の経過とともに過ごしてきました。市民リポーターを経験して、「私は大館のことをどれくらい考えていたのだろうか」と反省させられました。それは、大きな目標に向かって取り組んでいる人たちがたくさんいて、その人たちはみんな大館を良くしようと考えているのを、取材を通じて知ったからです。大館は、日本全体から考えれば地方の小さなまちにすぎない